



学内広報

No.1319

2005.9.14
東京大学広報委員会



オープンキャンパス2005行われる（4ページに関連記事）

CONTENTS

特別記事

潜水作業中の死亡事故と再発防止について … 2

東京大学オープンキャンパス2005 …… 4

一般ニュース …… 6

役員の就任・退任、小宮山総長が全国政治協商会議21世紀フォーラム等にて講演、HPAIR2005東京会議開催される、UT Forum（中国学系）学生フォーラム開催、「日本・ベトナム学生交流会」実施される、「東京大学大学案内」の配布開始、平成18年度センター試験受験案内の交付開始、入学者選抜要項の交付開始、外国学校卒業学生募集要項の交付開始、平成17年度第1回「東京大学外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」開催

部局ニュース …… 14

第24回比較法政シンポジウム開催、先端医療開発研究クラスターシンポジウムを開催、病院で総合防災訓練を実施、病院でサマーコンサート開催、夏休み航空宇宙工学教室2005開催、平成18年度大学院人文社会系研究科入学試験日程を発表、理学系研究科・理学部で留学生見学旅行実施、文部科学省タンパク3000新事務局

開設式、三鷹国際学生宿舎居住留学生の送別バーベキュー及び音楽会行われる、分生研で外国人留学生との懇談会開催、分生研主催「高校生のための生命科学シンポジウム」開催、シンポジウム「重力波によるインシュタイン宇宙の探査」開催、海洋研「海の日」一般公開、超低温容器検査所を開設、2005年度夏学期留学生センター日本語教育集中コース・特別コース（第40期生）の修了証授与式行われる、高輝度光源による先端的バイオ研究シンポジウム開催

掲示板 …… 22

AGS研究会平成17年度研究課題の募集、総合図書館付け図書の推薦について、データベース定期講習会のお知らせ、「高校生のための金曜特別講座」（冬学期）のお知らせ

EVENT INFO …… 27

淡青評論 ためらいと決断 …… 28

コラム

コミュニケーションセンターだより No.3-21

経済学部生を援農学生として受け入れてくれた平岡村を訪問-13

教育学部附属中等教育学校の生徒が遠泳に挑戦-21

東大OB明石顕選手、世界陸上50km競歩で15位-26

潜水作業中の死亡事故と再発防止について

平成17年7月4日（月）10時30分ごろ、本学大学院農学生命科学研究科水圏天然物化学研究室のリサーチフェロー、山下高広氏（30歳）が八丈島ナズマド地区で海洋無脊椎動物の試料サンプリング中に水難事故に遭われ、死亡いたしました。

水圏天然物化学研究室では松永教授、山下氏、博士課程の学生2名の計4名で7月3日（日）に八丈島に到着、翌7月4日（月）朝10時ごろに水中に入り、作業地点に向かいました。作業予定地点の直前で、山下氏がいったん海面に上がるとの合図を教授に送り、教授の了解を得て、浮上しました。

10時20分ごろ、近くで潜水中のインストラクターが山下氏の姿が見えないと指摘したため、一行は潜水作業を中止して陸上に上がり海上を目視、探索し、また近くを航行中の漁船の無線を通じて警察に連絡しました。捜索隊が出動（漁船14隻、ダイバー10名）し、12時46分、近くの海底で山下氏が発見されました。



山下高広氏



八丈島ナズマド地区

山下氏のご遺体は現地に駆けつけたご遺族と共に、翌5日に帰京、6日には友人によるお別れ会、8日にお通夜、9日に告別式が上野の「徳雲会館」にて友人等多数のご参列を得てしめやかに執り行われました。

山下氏は、平成5年4月に本学教養学部理科二類に入学後、平成8年4月に農学部生物生産科学課程水圏生産科学専修に進学し、翌年4月から水圏天然物化学研究室で卒業研究を始めました。卒業後、平成10年4月に大学

院農学生命科学研究科水圏生物科学専攻修士課程に入学、平成12年4月に博士課程に進学し、同研究室で研究を続けました。平成17年3月に博士課程を単位取得のうえ退学し、引き続き、同研究室においてリサーチフェローを務めていました。

山下氏は卒業研究において、細胞周期を制御する遺伝子に変異のある酵母の生育を阻害する新規物質を6種類、海綿から単離し、それらの化学構造を決定しました。また、大学院進学後は、血管新生阻害物質の発見が有用な抗腫瘍物質の開拓につながるに違いない、との信念の下、海洋無脊椎動物から、血管新生阻害物質の探索を続けました。血管新生阻害活性を調べるための実験は、繊細な条件の下で培養した細胞を、長時間、緻密に観察する必要がありますため、持続的な集中力が求められます。大学院在学中の苦労の結実として、新しい化合物をいくつか見だし、それらの構造決定がほぼ完結するところまでこぎ着けていて、学位取得の直前の段階でした。

水圏天然物化学研究室では、「海洋に生息する生物を天然有機化合物資源として開拓すること」に、焦点を合わせて研究を続けてきました。無脊椎動物、特に、海綿、刺胞動物（サンゴやイソギンチャクの仲間）および原索動物（ホヤ）に、抗腫瘍活性、抗菌活性あるいは酵素阻害活性などの生物活性を示す種が高頻度で認められることから、これらの生物種を日本各地で採取し、それらに含まれる有用物質を探索しています。特に伊豆半島や伊豆七島の海には豊かな生物相が存在し、そこには未利用海洋無脊椎動物が多数生息するため、同研究室では継続して無脊椎動物の採取を行ってきました。研究室としては、山下氏の研究成果を引き継ぎ、有用な抗腫瘍物質の開拓に関して研究成果の結実、更なる発展をさせることが期待されます。

山下氏は大学在学中はア式蹴球部に所属し、卒業後も同好会等でサッカーを続けていました。明るい性格のスポーツマンであり、研究室の仲間だけでなく、他の研究室からも高い信頼を得ていました。このことは、お通夜、告別式に多数の友人、関係者が参列されたことにも示されています。研究成果の結実と学位取得を目前にして、今回の事故に遭遇されたことは、ご本人はもとよりご遺族にとってもさぞご無念であったと拝察いたします。

志半ばで倒れられた山下高広氏のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

（大学院農学生命科学研究科・農学部）

このたびの潜水作業中の事故で殉職された山下高広氏のご冥福を、謹んでお祈り申し上げます。安全衛生の確保は本学の全ての活動の根幹をなすものであり、こうした事故が起きたことは、まことに痛恨の極みです。将来ある研究の途上で倒られた山下氏のご無念を思い、また大切なご子息を失われたご両親はじめご遺族の皆さま方のお悲しみはいかばかりかと、断腸の思いです。

東京大学では、本年4月に安全衛生管理体制を強化するため、従来の安全衛生管理室を改組して環境安全本部を設置し、また、安全衛生の理念と基本方針を定めました。そして、環境安全本部と各部局の安全衛生管理室は日常的な活動を通じて、教職員及び学生の安全衛生確保のために真剣な努力を続けてきました。にもかかわらず今回のような不幸な事故が発生したことは、安全教育や安全確保の体制になお十分でないものがあつたと考えざるを得ません。さきに8月22日に本学の事業活動関係者各位に通知しましたように、今後、安全に対する意識を一層高め、常に潜む重大事故の危険性を念頭において、事故災害の防止に努めていただきたく、全学の皆さまに改めて強くお願いいたします。

今回の事故については徹底的な原因の究明を行い、それを踏まえた再発防止策の確立と安全意識の周知徹底のために、全力をあげていきたいと考えています。

総長 小宮山 宏

事故の原因推定と再発防止への取り組み

東京大学では世界の知の頂点を目指して研究、教育活動に取り組んでいる。しかし、一度重大事故が発生すれば、事故の被災者やご家族の苦しみ、悲しみは言葉では言い尽くせないものがある。加えて、研究・教育活動そのものが大きく後退することだけではなく、状況によっては研究の継続が不可能になることを忘れてはならない。

潜水作業は学内複数の研究室で実施されており、今回の死亡事故を教訓に、二度と事故を起こさないため全学を挙げて取り組んでいく必要がある。

今回の死亡事故を振り返ると下記のようなリスク要因が挙げられる。

- 1) 今回の潜水作業では、研究室の作業チームでレジャーや業務を問わず潜水作業の基本であるバディシステムが明確な形でとられていなかった。
- 2) 労働安全衛生法では潜水作業は危険作業と位置づけ、潜水作業を行う者には潜水士の国家資格を所持することを義務づけている。しかしながら当該研究室では教職員の潜水士免許の取得はなかった。
- 3) 危険作業の一つである潜水作業については、危険性の認識と共に潜水作業に関する十分な安全教育や潜水作業従事者の技能向上のためのトレーニングが必要であり、この点が十分でなかった。

今回の死亡事故に関して、本学としては徹底した原因究明と再発防止のため学外第三者を加えた調査委員会を設置し、上記課題への対応のみならず事故の根底や大学の安全風土にまで遡って調査検討を行い、その結果を公表する予定である。

又、安全な研究・教育活動の基盤として学内における法遵守の徹底、安全確保に関する意識の高揚が必要であり、下記の取り組みを行う事としている。これらについては、次回以降、逐次学内広報にて報告する他、各種の手法を用いて周知、啓発していく予定である。

- ①潜水作業を含む法定危険作業について、無資格・無免許作業禁止の徹底
- ②各研究室の研究内容について安全面からの把握と作業に必要な法的資格保有の確認
- ③屋外作業や学外作業の実態把握とこれらのリスク最小化、緊急時の対応等の検討
- ④潜水作業等法定危険作業を実施している研究室間相互の事故発生防止、安全確保等を含む各種情報交換
- ⑤「安全確保は研究・教育の大前提」との視点に立った各種安全教育の充実
- ⑥安全に関する意識・文化高揚のための各種啓発活動、および、今回の事故反省の風化防止のための取り組み

用語の説明：バディシステムとはダイビングをする際、万一の場合相互に助け合うために2人1組の単位で活動すること。又その相手をバディ (buddy) という。

(環境安全本部)

特集

東京大学オープンキャンパス2005

近年、大学を知るには実際に志望校に足を運ぶのが一番の方法ということで、受験生の間ではオープンキャンパスが人気を博しています。東京大学でも、8月2日に本郷キャンパス、3日に駒場キャンパスでオープンキャンパスを開催しました。模擬授業や研究室訪問、キャンパスツアーなど、大学をより詳しく知ってもらうための様々なプログラムが用意され、2日間で2414人の高校生、受験生が参加しました。本特集では、その模様をみなさまにお届けします。

8月2日 本郷キャンパス

9:00～ 受付開始



入場受付は安田講堂。受付開始前から、たくさんの参加者が詰めかけていた。ここで当日の予定表やパンフレット、キャンパスマップなどがもらえる。

9:30～10:00 オリエンテーション



安田講堂で行われるオリエンテーションでは、まず初めに小宮山総長から参加者のみなさんへ挨拶とメッセージが送られた。続いて、浜田理事・副学長により東京大学の歴史や活動が説明される。最後に大木広報委員長が当日の詳しいスケジュール説明を行い、オープンキャンパスが本格的にスタート。伝統ある安田講堂の中で参加者たちは東大にきたという実感を強めたようだった。

10:30～13:30 学部コース

学部コースでは、法・医・工・文・理・農・経済・教育・薬学部の9学部が、それぞれ模擬授業や研究室見学、学生との質疑応答など、企画盛りだくさんで参加者を歓迎。

学部の特徴や、どんなことを学べるかを直接知ることができる貴重なチャンス。

工学部



文学部



教育学部



経済学部



オープンキャンパスとは、高校生や受験生に大学を公開し、実際に施設の見学、模擬授業、教員・学生との懇談などを通じて大学のことを深く理解してもらおうというイベント。大学によっては入試に関するアドバイスをしたり、願書を無料配布する大学もある。

東京大学のオープンキャンパスは、2000年からスタート。2003年からは駒場キャンパスでも開催。参加方法は事前申込み制で、毎年多数の申込みをいただき、抽選で参加者が決められている。今年は全体で3303名の応募があった。

14:30～17:00

学生ガイダンス、キャンパスツアー、各研究所等の自由見学

学生ガイダンス、キャンパスツアーは、4回に分けて行われ、参加者は指定された回に参加する。同時に各研究所等の自由見学も行われ、応募者多数で学生ガイダンス、キャンパスツアーに参加できなかった人も、十分納得の内容となっている。

※時間は A コースの時間(B コースは 10:30～受付、11:00～オリエンテーション、11:30～14:30 学生ガイダンス・キャンパスツアー・研究所自由見学、14:30～17:30 学部コース)



大学での生活を学生が案内。各学部学生との質疑応答もあり、分からないことや疑問があれば積極的に質問してみよう。

現役東大生がツアーガイド役となり、東大の歴史や学生生活のエピソードを交えながらキャンパスの見所を案内してくれる。

(自由見学が行われた施設)

総合研究博物館、附属図書館、東洋文化研究所、社会科学研究所、史料編纂所、分子細胞生物学研究所、広報センター

農学部コース体験レポート

学部コースではどんなことが行われているのか、実際に農学部コースに参加してきました！



弥生講堂に集合。学部長からのメッセージや農学部の概要説明を聞く。参加者たちは、農学部の奥深さを知り、興味がさらに増したはず。



グループに分かれて施設見学。まずは水生生物飼育水槽室へ。海の生物を飼育している水槽がたくさんあった。



アグリバイオインフォマティクス人材養成ユニット。ここでは一人一台パソコンが用意され、先端研究の一端に触れる。



家畜病院では、実際に使われている治療器具を間近に見ながら説明を受ける。



電子顕微鏡室。実際に参加者が顕微鏡を操作することができた。



終了。最後は弥生講堂に戻り、アンケートを記入。とても暑い一日だったけれど、冷たい飲み物が用意されていたり、農学部の人たちの心遣いが印象に残った。施設見学や、実際に先生や学生の皆さんと話すことで、参加者は農学部に入って学びたいという気持ちが強まったことだと思う。長時間お疲れさまでした。

17:30 終了

東大の教育活動の一端に実際に触れ、キャンパスの雰囲気を感じたことは、入試という視点からだけではない新たな理解を深めるよい機会となったのではないだろうか。今回のオープンキャンパスが、参加した皆さんにとって実りあるものとなることを祈りたい。

★★参加者の感想★★

- ・安田講堂に入れて感激でした。
- ・期待以上の内容で、頑張って東大に入りたいと思った。
- ・模擬講義も受けられ、以前より大学というものが近く感じられました。
- ・東大生の生の声が聞いてよかった。
- ・希望の学部に参加できるともっとよい。
- ・説明が難しくて全然分からなかったけど、熱意がよく伝わってきた。
- ・漠然としていたものが少し見えてきた。
- ・サークルの様子をもっと知りたい。
- ・長時間なので疲れた。
- ・敷地内で迷っていたら係の人が親切に案内してくれた。

8月3日 駒場キャンパス



3日は駒場キャンパスで開催。木畑洋一教養学部長の挨拶の後、駒場Ⅰ・Ⅱキャンパス、大学院数理科学研究科の紹介、長谷川秀一教授による総合講演が行われた。午後は、文系・理系の講義、東大生への質問コーナー、実験デモ・パネル展示などの企画が用意された。先端科学技術研究センターでは研究室見学ツアーが実施され、好評を得た。参加者は560人に上り、駒場キャンパスの魅力を感じた一日となった。



■ 役員の就任・退任

以下のとおり、お知らせいたします。

就任（7月19日付）

副理事 藤井 博英 担当：基金
（任期：～平成18年3月）

退任（6月10日付）

理事 池上 久雄

■ 研究協力部

小宮山総長が全国政治協商会議21世紀フォーラム等にて講演

9月5日（月）～7日（水）、中国・北京市において、全国政治協商会議21世紀フォーラム「中国と世界の持続的発展を目指して」が開催され、本学からは、小宮山宏総長、桐野豊理事・副学長等が参加し、5日には、小宮山総長が日本から招待された唯一の招待講演者として、「世界の持続可能性実現に向けて」と題する講演を行った。開会に先立って、小宮山総長は、マハティール・マレーシア前首相、シュミット・ドイツ元首相等とともに、温家宝國務院総理、賈慶林全国政治協商会議主席を表敬訪問した。

また、6日（火）には、中国科学院研究生院において、“Workshop on Environment and Human Sustainability in Asia”が開催され、小宮山総長が「アジア社会の持続的発展を実現する技術」について講演をおこなった他、日中の研究者がサステナビリティ学に関する発表をおこなった。



小宮山総長と温家宝中華人民共和國國務院総理

■ 研究協力部

HPAIR2005東京会議開催される

8月22日（月）～26日（金）に、HPAIR（Harvard Project for Asian and International Relations）2005東京会議が、六本木ヒルズ及び東京大学において開催された。本会議は、ハーバード大学がアジアで主催する最大の公式行事であり、東京で開催される今年は、本学がホスト国側として共催した。会議の運営は、昨年準備段階より終了まで、ハーバード大学及び本学学生を中心とする準備委員会によって行われ、その努力の甲斐あり、会議は成功裏に終了した。以下は、ホスト国準備委員会からの報告である。



セッションの様子

8月20日（土）と21日（日）に、HPAIR2005東京会議ホスト国準備委員会主催で、22日（月）から開催される同会議の参加者を対象に、Pre-Conference Tourを行った。東京1 Day Tripというバスツアーと、浴衣の着付けや浅草・渋谷・新宿の散策を含む日本の文化体験ツアーの2コースを設け、2日間でのべ約120名の参加を得た。

8月22日（月）と23日（火）に、六本木ヒルズにおいてHPAIR 2005東京会議が開催された。世界53カ国からの約730名の学生と、50名をこえる政財界の要人や学術専門家が講師として出席した。

まず22日（月）には、Grand Hyatt TOKYOにおいて開会式が催され、古田理事・副学長が本学代表として挨拶をされた。その後アカデミーヒルズ49階と40階において、安全保障・法と信頼・高等教育・保健医療・現代美術・移民問題の6つの分科会に分かれて学術会議が行われた。各分野の専門家の話を聞き、直接質問をする機会も設けられ、参加者同士の活発なディスカッションも見られた。この日の夜にはプラチナスポンサーである大和証券の日本人参加者向けリクルートイベントも行われ

た。

23日（火）には、世界銀行の協力で、日・中・印の人口問題を経済的視点からとらえて考えるという全体会議が設けられ、その後は各分科会での講演が22日に引き続いて行われた。また、同日夜には、アカデミーヒルズにおいてInternational Nightという交流会も開かれ、各国からの学生が伝統衣装に身を包み、特産品や文化を紹介したり、民族舞踊などを紹介したりと、異文化理解・交流が進んだ。

8月24日（水）には、各分科会の大学院生の研究発表会が東京大学法学政治学系総合教育棟で開催され、同時にホスト国準備委員会の主催で、主として学部生を対象としたField Tripも行われた。研究発表会では、講師陣や会場の他の参加者からのコメントも寄せられ、発表者にとって有意義な機会となるとともに、他の参加者にとっても様々な視点からの多様な分析に触れる良い機会となった。各分科会の内容は次のとおり。

安全保障分科会では、①防衛庁での見学・日本の安全保障政策についての講演・自衛官との昼食会、②日本国際協力機構での人間の安全保障についての講演・開発援助プロジェクトの立案管理手法であるPCM（Project Cycle Management）手法の実習、③被爆者と従軍慰安婦問題の原告弁護士の講演を聞く“戦争と記憶”のセッションが設けられた。法と信頼分科会では、①品川食肉市場を見学しBSEやトレーサビリティについて学び、②個人間の信頼がどのように形成されていくのかという心理実験もおこなった。高等教育分科会では、途上国の農業リーダーを育成支援しているアジア学院を訪問し、関係者から話を聞くだけでなく農業実習も行った。保健医療分科会では、①東京大学医科学研究所の見学、②東洋医学（針・漢方）の体験、③国連人口基金や国境なき医師団などのNGOを迎えてのパネルディスカッションが開催された。現代美術分科会では、さまざまな美術館をまわり、複数の女性作家による現代美術の作品に触れた。移民分科会では、①横浜中華街の散策・中華料理店で昼食会・歴史資料館や外国人墓地の見学、②大久保の散策・新宿区当局や移民支援NGOから話を伺う、という機会を設け、多文化共生の歴史と現状・問題点やこれからのあり方を考えた。

8月25日（木）には、University Dayということで、各分科会の最後日のセッションが全て東京大学法学政治学系総合教育棟で行われた。安全保障分科会では前3日間で学んだことを使って行うクライシスゲームが設けられるなどしており、各分科会とも最後ということで、まとめやプレゼン用に時間を割いた分科会が多かった。

また、この日は安田講堂にて、小宮山総長の講演及び、

東アジアの経済的地域統合についての講演が行われた。

さらに、昼には、スピーカーや講師陣を招いて、山上会館において本学主催のランチレセプションが設けられ、夜にはアカデミーヒルズ51階でのVIPレセプション、ANAホテルで正装での晩餐会も行われた。

8月25日（木）と26日（金）には、HABCIA（Harvard Asia Business Conference in Asia）という会議がおこなわれた。これは一橋大学大学院商学研究科が協力校となっており、参加者は約50カ国で250名をこえた。

25日（木）にはケーススタディセッション2つ（『フレッシュネスバーガー—成熟市場における後発企業の参入戦略—』、『インテック—変革を企業体質に—』）が本学で開催された。

26日（金）にはアカデミーヒルズ40階を会場に、6つのパネルディスカッション（①バリューチェーンの発展、②ラグジュアリーグッズ、③金融サービス—プライベートエクイティとベンチャーキャピタル、④ブランディング、⑤自動車、⑥テクノロジー—コミュニケーション&IT）と、3つの全体基調講演（ティエリー・ポルテ氏、千本倅生氏、竹中平蔵氏）が設けられた。企業人やMBAコース学生はもちろん、25日までのHPAIR学術会議の参加者である一般大学生・大学院生も、ビジネスの先端で活躍する講師陣の話に大いに刺激を受けていた。

なお、26日昼には、プラチナスポンサーであるダイムラークライスラー主催のランチレセプション、夜にはHPAIR2005東京会議ホスト国準備委員会主催のクロージングレセプションが開催された。



セッションの様子

研究協力部

UT Forum (中国学系) 学生フォーラム (UT FORUM「学生論壇」-東京大学×北京大学-) 開催

8月8日(月)文学部教官談話室にて、北京大学の学生を招待し、UT Forum (中国学系) 学生フォーラム (UT FORUM「学生論壇」-東京大学×北京大学-) が開催された。フォーラムは70名程の聴講者が来場した中で、藤原克己教授(人文社会系研究科)と大橋完太郎



フォーラムの様子

さんと(総合文化研究科博士課程3年)の開会挨拶から始まり、東京大学側と北京大学側の8名の報告発表と活発な質疑応答がなされ、日本語と中国語を互いに通訳しながら意見を交わした。そして盛況な中、古田元夫理事・副学長と劉樹森北京大学外国語学院福院長の閉会挨拶で幕を閉じた。

終了後の懇親会では、両大学の学生が学術のみならず文化など様々な話題を通して歓談し、交流の親密さを深めた。

なお、UT Forum学生フォーラムは、4月28日(木)、29日(金)に中国の北京大学、清華大学及び中国科学院にて開催したUT Forumと同時期の開催予定が、中国情勢から延期となっていたものであり、この度改めて本学で開催する運びとなった。8月8日(月)は北京大学と本学学生によるフォーラムであったが、今後、清華大学学生との学生フォーラムが9月26日(月)に、中国科学院学生との学生フォーラムが9月29日(木)・30日(金)にそれぞれ開催されることになっている。

学生部

「日本・ベトナム学生交流会」実施される

8月23日(火)、財団法人学生サポートセンター主催の国際交流事業「2005年日本・ベトナム学生交流会」のベトナム人学生一行18名(ハノイ外国語大学、ハノイ工科大学など)が本学を来訪した。

当日はジュニアTAによるキャンパスツアーガイドの案内により、赤門、三四郎池、七徳堂、安田講堂などを見学した。各所においてガイドの学生より施設の歴史などの興味深い説明がなされ、ベトナム人学生からも活発に質問が投げかけられた。特に、大学構内に自然が多く残っていることや総合図書館、安田講堂等の特色あ

る建築様式に強い関心を示していた。

また、本学で学ぶベトナム人留学生3名もツアーに参加し、母国語を介した交流も見受けられるとともに、日本語を学んでいるベトナム人学生も多く、ガイドの学生との会話も弾んでいた。



赤門前での記念撮影

見学後には、山上会館で昼食会が催され、ベトナム研究が専門の古田理事・副学長よりベトナム語による歓迎の挨拶があり、続いて、訪日団長のベトナム教育訓練省国際関係部副部长グエン・ゴック・フン氏から交流会のお礼の言葉と記念品が贈られた。それぞれのテーブルでは終始なごやかな雰囲気の中、ガイドの学生も加わり、互いの国の印象や文化、学生生活等について様々な情報交換が行われた。

3時間という短い滞在時間にもかかわらず、バスの出発の際にはツアーガイドへお礼の贈り物を渡したり、連絡先を交換し合いながら、お互いの友情を確かめ合いつつ、交流会の学生達は本学を後にした。



記念品贈与風景

学生部

平成18年度「東京大学大学案内」の配布開始



東京大学として初めての大学案内「東京大学案内 東京大学で学びたい人へ」が完成し、8月1日（月）から一般配付が始まった。

これまで、受験者に対しての大学の案内は、選抜要項と募集要項の中で前期課程と後期課程について簡単に紹介している程度であった。本書は、

本書のアドミッションポリシーを明示し、各学部・大学院の紹介、キャンパス案内、学生生活、入試情報などを盛り込み、学志の高い人材を広く求めるための総合的な大学案内となっている。

●大学案内の入手方法 郵送希望の場合

- (1) 東京大学のホームページから請求する（受付から2～3日で送付）
- (2) テレメールで請求する（受付から2～3日で送付）
 - ①インターネット（携帯電話・パソコン）でアクセスする。<http://telemail.jp>（携帯電話・パソコンとも共通アドレス）
 - ②電話 IP電話050-2011-0120
- (3) 郵便局で請求する（受付から1週間程度で送付）

※10月から案内開始

郵便局に設置されている「全国国立大学・短期大学募集要項（願書）請求申込書」（入学願書ゆうパックカタログ）に必要事項記入の上、最寄りの郵便局窓口で申し込みをする。

(1) (2) (3) の請求方法の問い合わせ先
⇒ 全国学校案内資料管理センター
電話06-6231-5992（月～金 9:30～18:00）

※東京大学からは郵送をしないので、ご注意ください。

大学に直接訪問する場合 配付場所

- (本郷地区キャンパス)
- 正門、赤門、広報センター（龍岡門）、コミュニケーションセンター（赤門脇）、生協（安田講堂売店、書籍部）、農学部正門
- (駒場Iキャンパス)
- 正門、生協売店

大学院



各大学院紹介のページ

学生部 平成18年度センター試験受験案内の交付開始

「平成18年度大学入試センター試験受験案内」の交付が9月1日（木）から全国の国公立大学等で一斉に始まった。

「受験案内」の交付を受けようとする者は、最寄りの国公立大学又は大学入試センター試験を利用している私立大学に、直接又は出身高校を經由して申し込むことになっている。本学では本郷キャンパス（正門、赤門、広報センター（龍岡門）、コミュニケーションセンター（赤門脇）、生協（安田講堂売店、書籍部）、農学部正門）、駒場Iキャンパス（正門、生協売店）で交付している。

学生部 平成18年度入学者選抜要項の交付開始

「平成18年度東京大学入学者選抜要項」が決定し、各都道府県教育委員会等に通知するとともに、8月1日（月）から、本郷キャンパス（正門、赤門、広報センター（龍岡門）、コミュニケーションセンター（赤門脇）、生協（安田講堂売店、書籍部）、農学部正門）、駒場Iキャンパス（正門、生協売店）で交付を開始した。また、東京大学ホームページから請求することができる。

入学者選抜の実施教科・科目等は、別表1・2（10・11ページ）のとおりである。

平成18年度 東京大学入学選抜の実施教科・科目等について(文科各群)

別表1

学部・学科等名 及び入学定員等 〔平成17年度〕 志願倍率	学力検査等の 区分・日程	注1 大学入試センター試験の 利用教科・科目名		注2 2段階 選抜	注3 大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等					特別の選 抜方法等	その他		
		教科	科目名等		試験の区分	国語	歴史	公民	数学			理科	外国語
文科一類 5.4 4.15人 前期 37.3 後期 4.2 その他 若干	前期 2月25日 ・26日	国語	世A、世B、日A、日B、地理A、地理B から1	約 3.0 倍	センター試験	200	100	100	200	100	200	900	帰国子女 外国人 追加合格
		地理 外	英・独、仏、中、韓から1 〔6教科7科目〕			120	120	80	120	200	400		
文科二類 4.8 3.65人 前期 32.7 後期 3.8 その他 若干	後期 3月13日	国語	世A、世B、日A、日B、地理A、地理B から1	約 5.0 倍	センター試験	200	100	100	200	100	200	900	帰国子女 外国人 追加合格
		地理 外	英・独、仏、中、韓から1 〔4教科4科目〕			120	120	80	120	200	400		
文科三類 4.9 4.85人 前期 43.2 後期 5.3 その他 若干	前期 2月25日 ・26日	国語	世A、世B、日A、日B、地理A、地理B から1	約 3.0 倍	センター試験	200	100	100	200	100	200	900	帰国子女 外国人 追加合格
		地理 外	英・独、仏、中、韓から1 〔6教科7科目〕			120	120	80	120	200	400		
文科三類 4.9 4.85人 前期 43.2 後期 5.3 その他 若干	後期 3月13日	国語	世A、世B、日A、日B、地理A、地理B から1	約 5.0 倍	センター試験	200	100	100	200	100	200	900	帰国子女 外国人 追加合格
		地理 外	英・独、仏、中、韓から1 〔4教科4科目〕			120	120	80	120	200	400		

注1 【大学入試センター試験の利用教科・科目名】 欄
工業数理基礎、簿記、会計、情報関係基礎を選択できる者は、高等学校又は中等教育学校においてこれ
らの科目を履修した者及び進修学校の高等数理の修了(見込み)者だけである。

注2 【個別学力検査等】 欄
(1) 英語のリスニングテストの成績については、利用しない。
(2) 英訳の出題範囲は次のとおりである。
数学B(微分、積分、ベクトル)
(3) 前期日程の英語試験の一部に閉き取り試験を行う。
(4) 論文Iは、外国語読解を主とし、思考力・表現力を見る。(外国語は、英語・ドイツ語・フランス語・中
国語のうちから、一つを試験場において選択することができる。)

注3 【大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等】 欄
(1) 前期日程：学方試験の成績の判定は、大学入試センター試験の成績を「1」、個別学力検査の成績を「4」
とす。
(2) 後期日程：合格者の判定は、個別学力検査の結果に基づいて行う。ただし、判定に必要な場合は、
大学入試センター試験の成績や調査書を考慮することがある。
(3) 後期文科三類の※印を付してある教科は、複数の科目を受験した場合に高得点の科目の成績を合否判定
に利用することを表す。

(5) 論文II(文III)は、人類の思想、歴史、行動、教育及び文化全般に関する諸学をめぐって、入学
後それらを意欲的に学習・研究するための基礎を問う。理解力・表現力・思考力を見るが、特に正確な知
識に裏付けられた獨創性を評価する。
(6) 論文Iは、文科各群に共通の問題
(7) 論文IIは、文科各群ごとに別の問題
(8) 旧教育課程を履修した高等学校卒業生等に対しては、出題する教科・科目の内容によって配慮を
行うものとする。

平成18年度 東京大学入学者選抜の実施教科・科目等について (理科各類)

学部・学科等名 及び入学定員等 〔平成17年度〕 志願倍率	学方候 区・分 日程		注1 大入試センター試験の 利用教科・科目名等		科目名等	注2 2段階 選抜 倍	試験の区分	大入試センター試験・個別学力検査等の配点等				注3 配点 合計	特別の選 抜方法等	その他
	国語	数学	英語	理科				外国語	総合 科目	面接				
理科二類 4. 3 1. 1,477人 前期1, 025 後期 122 その他 若干	前期 2月25 ・26日	国語 世A、世B、日A、日B、地理A } から1 地理B 現社、倫、政経 数I・数A 数II・数B、工、簿・会、情報から1 物I、化I、生I、地学Iから2 英、独、仏、中、韓から1 ※地理、公民を合わせて1教科として扱う。 〔5教科7科目〕	公民	数	国語総合・国語表現I 数I・数II・数加、数A・数B・数C 物I・物II、化I・化II、生I・生II、地 学I・地学IIから2 英(英I・英II・英III・リーディング)、独、仏、 中から1	約 2.5 倍	センター試験	200 * 100 * 100 * 200	200	200	200	900	外国人女 外国人 追加合格	
	後期 3月13 ・14日	数 数II・数B、工、簿・会、情報から1 物I、化I、生I、地学Iから1 英、独、仏、中、韓から1 〔3教科4科目〕	理	数	総合科目I 総合科目II 数I・数II・数加、数A・数B・数C 物I・物II、化I・化II、生I・生II、地 学I・地学II } から1	約 3.0 倍	個別学力検査	80	120	120	120	440		
理科二類 4. 4 5.51人 前期 492 後期 59 その他 若干	前期 2月25 ・26日	国語 世A、世B、日A、日B、地理A } から1 地理B 現社、倫、政経 数I・数A 数II・数B、工、簿・会、情報から1 物I、化I、生I、地学Iから2 英、独、仏、中、韓から1 ※地理、公民を合わせて1教科として扱う。 〔5教科7科目〕	公民	数	国語総合・国語表現I 数I・数II・数加、数A・数B・数C 物I・物II、化I・化II、生I・生II、地 学I・地学IIから2 英(英I・英II・英III・リーディング)、独、仏、 中から1	約 3.5 倍	センター試験	200 * 100 * 100 * 200	200	200	200	900	外国人女 外国人 追加合格	
	後期 3月13 ・14日	数 数II・数B、工、簿・会、情報から1 物I、化I、生I、地学Iから1 英、独、仏、中、韓から1 〔3教科4科目〕	理	数	総合科目I 化I・化II 生I・生II	約 5.0 倍	個別学力検査	80	120	120	120	440		
理科三類 6. 4 90人 前期 80 後期 10 その他 若干	前期 2月25 ・26・ 27日	国語 世A、世B、日A、日B、地理A } から1 地理B 現社、倫、政経 数I・数A 数II・数B、工、簿・会、情報から1 物I、化I、生I、地学Iから2 英、独、仏、中、韓から1 ※地理、公民を合わせて1教科として扱う。 〔5教科7科目〕	公民	数	国語総合・国語表現I 数I・数II・数加、数A・数B・数C 物I・物II、化I・化II、生I・生II、地 学I・地学IIから2 英(英I・英II・英III・リーディング)、独、仏、 中から1 面接	約 4.0 倍	センター試験	200 * 100 * 100 * 200	200	200	200	900	外国人女 外国人 追加合格	
	後期 3月13 ・14日	数 数II・数B、工、簿・会、情報から1 物I、化I、生I、地学Iから1 英、独、仏、中、韓から1 〔3教科4科目〕	理	数	総合科目I 化I・化II 生I・生II 面接	約 5.0 倍	個別学力検査	80	120	120	120	440		

注1 【大入試センター試験の利用教科・科目名】
工業数理基礎、簿記・会計、情報関係基礎を満点できる者は、高等学校又は中等教育学校においてこれら
の科目を履修した者及び専修学校の高専課程の修了(見込み)者だけである。
(2) 英語のリスニングテストの成績については、利用しない。
注2 【個別学力検査等】
(1) 前期日程の英語試験の一部から聞き取り試験を行う。
数学B、数学Cの出題範囲は次のとおりである。
数学B (数列)・(ベクトル)・(式と曲線)・(行列とその応用)・(式と曲線)
「物理I・物理II」
「化学I・化学II」
「生物I・生物II」
「地学I・地学II」
注3 【大入試センター試験・個別学力検査等の配点等】
(1) 前期日程：学力試験の成績の判定は、大入試センター試験の成績(総得点)と個別学力検査の成績(総得点)とを総合して行う。この比率は、大入試センター試験の成績を「1」、個別学力検査の成績を「4」とする。
(2) 後期日程：合格者の判定は、個別学力検査の結果に基づいて行う。ただし、判定に必要な場合は、大入試センター試験の成績や調査書を考慮することがある。
(3) 配点に*印を付してある教科は、複数の科目を受験した場合に高得点の科目の成績を合否判定に利用することを要す。
(4) 配点に**印を付してある教科(理科)は2科目受験を要する。

学生部

平成18年度外国学校卒業学生募集要項の交付開始

「平成18年度東京大学外国学校卒業学生募集要項」が決定し、7月1日（金）から入学志願者に対し、本郷キャンパス（正門、赤門、広報センター（龍岡門）、コミュニケーションセンター（赤門脇）、生協（安田講堂売店、書籍部）、農学部正門）、駒場Ⅰキャンパス（正門、生協売店）で交付を開始した。また、東京大学ホームページから請求することができる。

募集人員、選抜期日、選抜方法、出願資格など、特別選考の概要は下表のとおりである。

平成18（2006）年度 外国学校卒業学生特別選考

東京大学

実施科類	文科一類、文科二類、文科三類 理科一類、理科二類、理科三類
募集人員	文科一類、文科二類、文科三類 理科一類、理科二類、理科三類 第1種、第2種 各若干名
出願資格	<p>[第1種]（外国人であって日本国の永住許可を得ていない者） 平成13（2001）年4月1日から平成18（2006）年3月31日までの間に、次の基礎資格を取得し、かつ、要件を満たしている者とする。</p> <p>(1) 基礎資格 次のア、イいずれかに該当すること。 ア 外国において、我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校を修了した者及び修了見込みの者、又はこれに準ずる者で文部科学大臣の指定したものの「外国において、我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校」とは、地理的、場所的に外国で、原則として、その国において制度上正規の学校教育に位置づけられたものであって、修了により大学への受験資格を得られることを要する。インターナショナルスクールやアメリカンスクール等の出身者については、本規定によって出願が認められないケースや出願資格の確認等に時間がかかる場合があるので、早めに照会すること。 イ 文部科学大臣の指定した者 ○ 外国において、スイス民法典に基づく財団法人である国際バカロレア事務局が授与する国際バカロレア資格を有する者で18歳に達したものの ○ 外国において、ドイツ連邦共和国の各州において大学入学資格として認められているアビトゥア資格を有する者で18歳に達したものの ○ 外国において、フランス共和国において大学入学資格として認められているバカロレア資格を有する者で18歳に達したものの</p> <p>(2) 要件 次の掲げるすべての要件を満たすこと。 ア 独立行政法人日本学生支援機構が実施する日本留学試験（平成17（2005）年6月、11月実施のいずれか）の所定の教科をすべて受験すること（日本語・英語いずれの出題言語でも受験可）。所定の教科とは、文科各類を志望する者は文科系の教科である「日本語」・「総合科目」・「数学（コース1）」、理科各類を志望する者は理科系の教科である「日本語」・「理科（物理・化学・生物から2科目選択）」・「数学（コース2）」のことである。注）数学のコース選択を注意すること。コースの選択を間違えた者は、第1次選考不合格者とみなすので注意すること。 イ TOEFL(Test of English as a Foreign Language)を受験すること（PBT、CBTいずれでも可）。なお、出願期間までにOfficial Score Report又はExaminee's Score Recordが提出できれば、受験時期は問わない。 ウ 外国の学校に、原則として、最終学年を含め継続して1年以上在学し、原則としてその最終学校を修了すること。</p> <p>[第2種]（日本人及び第1種以外の外国人） 平成16（2004）年4月1日から平成18（2006）年3月31日までの間に、次の基礎資格を取得し、かつ、要件を満たしている者とする。</p> <p>(1) 基礎資格 次のア、イいずれかに該当すること。 ア 外国において、我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校を修了した者及び修了見込みの者、又はこれに準ずる者で文部科学大臣の指定したものの「外国において、我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校」とは、地理的、場所的に外国で、原則として、その国において制度上正規の学校教育に位置づけられたものであって、修了により大学への受験資格を得られることを要する。インターナショナルスクールやアメリカンスクール等の出身者については、本規定によって出願が認められないケースや出願資格の確認等に時間がかかる場合があるので、早めに照会すること。なお、文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設出身者は出願が認められない。 イ 文部科学大臣の指定した者 ○ 外国において、スイス民法典に基づく財団法人である国際バカロレア事務局が授与する国際バカロレア資格を有する者で18歳に達したものの ○ 外国において、ドイツ連邦共和国の各州において大学入学資格として認められているアビトゥア資格を有する者で18歳に達したものの ○ 外国において、フランス共和国において大学入学資格として認められているバカロレア資格を有する者で18歳に達したものの</p> <p>(2) 要件 次の要件を満たしていること。 外国の学校に、原則として、最終学年を含め継続して3年以上在学し、その最終学校を修了すること。ただし、最終学年の休業等によって書類上の在学期間が3年未満となる場合についても、3年以上在学したものとみなす場合がある。</p>
選抜方法等	<p>[第1種]（外国人であって日本国の永住許可を得ていない者） (1) 第1次選考 書類選考、日本留学試験及びTOEFL（Test of English as a Foreign Language）の成績 (2) 第2次選考 小論文、面接 なお、小論文については次のとおりである。 [小論文] 2問を課す。 2問とも日本語で解答すること。</p> <p>[第2種]（日本人及び第1種以外の外国人） (1) 第1次選考 書類選考 (2) 第2次選考 小論文、学力試験、面接 なお、小論文及び学力試験の出題教科・科目については次のとおりである。 [小論文] 2問を課す。 第1問は日本語で解答し、第2問は次の言語のうちからあらかじめ出願の際に届け出たもので解答すること。英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語、イタリア語、韓国朝鮮語、アラビア語</p> <p>[学力試験] (文科各類) 外国語 英（英Ⅰ、英Ⅱ、リーディング）、独、仏、中から1 ただし、問題の一部分は、届け出た外国語に代えて、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語、韓国朝鮮語のうちから一つを試験場において選択することができる。</p> <p>(理科各類) 数学 数Ⅰ、数Ⅱ、数Ⅲ、数Ⅳ、数B（数列、ベクトル）、数C（行列とその応用、式と曲線） 理科 物Ⅰ・物Ⅱ、化Ⅰ・化Ⅱ、生Ⅰ・生Ⅱ、地学Ⅰ・地学Ⅱから2</p>
出願期間	第1種 平成17（2005）年12月1日（木）から12月9日（金）まで 第2種 平成17（2005）年11月1日（火）から11月10日（木）まで
選抜期日	第1種 平成18（2006）年2月25日（土）、3月16日（木） 第2種 平成18（2006）年2月25日（土）・26日（日）、3月16日（木）
合格発表日	平成18（2006）年3月22日（水）
その他	「平成18（2006）年度外国学校卒業学生募集要項」は、交付中である。



噴水

研究協力部

平成17年度第1回「東京大学外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」開催

このたび、旧東京大学外国人留学生後援会を引き継ぎ、本年4月に東京大学基金の特定基金として設置された「東京大学外国人留学生支援基金」による、第1回の同基金奨学生証書授与式が開催された。同基金に寄せられた皆様からの寄附により、今年度も旧外国人留学生後援会と同様、前期採用分として20名の奨学生を決定し、7月25日（月）、関係役員等の臨席の下、小宮山総長から奨学生に証書が授与された。

引き続き、小宮山総長から、日本における環境問題への取組みを例に挙げ、世界の中の日本について紹介があった後、出席の奨学生に対し、「一つの分野を分かるまで、知識の構造化を意識して学ぶこと」の重要性について語られた後、「本質を捉える知」、「他者を感じる力」及び「先頭に立つ勇気」を持ってほしい旨メッセージが伝えられた。



スピーチを行う陳西貴さん

次いで、奨学生を代表して大学院医学系研究科博士課程在籍の陳西貴さんから、「外国人留学生支援基金の奨学生として、寄附者のお心に添

えるよう東京大学の学生に相応しい、そして満足できる成果を出せるように一生懸命努力したい。」との謝辞が述べられた。

同奨学金は、基金の趣旨に御賛同いただいた教職員、卒業生及び関係者の御支援の賜物であり、ここに重ねて御礼申し上げる次第である。



東京大学外国人留学生支援基金平成17年度第1回奨学生

太平洋戦争中、経済学部の学生を援農学生として受け入れてくれた平岡村を訪問

7月10日（日）、経済学研究科長と副研究科長の計三名で平岡村（現在は千葉県袖ヶ浦市内）を訪問し、太平洋戦争中に援農学生として経済学部の学生を受け入れてくれた地域の方々と当時のお話を聞きながら村内ゆかりの地を回った。



当時、東京大学の学生、とりわけ経済学部など文科系の学生はその大多数が戦地へ送られた。その中のかんりの学生が特攻隊などに送られ命を失った。そうした中で当時の経済学部長は援農という学徒勤労員で学生を千葉県の平岡村に送り出したのだ。学生を徴兵から救いたいという思いがあったのだろう。また、ひょっとしたらすでに日本が戦争に負けることを予想し、戦後日本を復興させるために優秀な人材を残しておきたいという願いもあったのかもしれない。平岡村の方々もこれらの学生を暖かく迎え入れてくれた。平岡村へ行った100名前後と推測される学生はこの措置によって命を救われる結果になったのだ。当時の学生たちは戦後60

年たった今でも平岡村と交流を続けており、今回は経済学部としても正式に執行部が平岡村を訪問させていただくことになった。



平岡村では、学生たちが寝泊まりした住宅、農作業をしていた場所、当時学生たちが使用するために持ち込んだ食器などを見せてもらった。写真は現在でも残っている当時の食器の一部であるが、この写真には「経済学部」という焼き印も写っている。もう一つの写真は援農の学生と地元の方が当時いっしょに撮影したものである。

（経済学研究科・経済学部 伊藤元重）

大学院法学政治学研究科・法学部
第24回比較法政シンポジウム開催

大学院法学政治学研究科附属比較法政国際センターは7月22日（金）、第24回比較法政シンポジウム「現代会社法制の世界的潮流」をサントリーホール小ホールで開催した。

今回のシンポジウムでは、ピアニスト中島剛氏の協力を得て、講演前にミニ・コンサートを行った。中島氏は「ノクターン」（ショパン）と「シャコンヌ」（バッハ/ブゾーニ）を演奏し、シンポジウムへの導入としての新しい試みは参加者たちを深く印象づけた。

シンポジウムは宮廻美明教授の司会により、第1セッションはレイニア・クラークマン ハーバード・ロースクール教授による「America's Law of Defensive Tactics: What Happened in Delaware and Will It Happen Elsewhere?」、第2セッションは本センター客員教授であるジェラルド・エルティーク スイス連邦工科大学チューリッヒ教授の「Increasing Director Independence: The Flaws in Current Reforms and How to Address Them」、第3セッションは、弁護士ジャック・ビュアル ハーバート・スミス・パリ所長による「From Corporate Governance to Corporate Social Responsibility」と題した各報告が行われた。休憩を挟んで、マーク・ラムザイヤー ハーバード・ロースクール教授とブルース・アロンソン クレイトン・ロースクール助教授が報告に対するコメントを行ない、質疑応答後、神田秀樹教授が全体のまとめを行った。今回のシンポジウムは、学外で開催するシンポジウムの目的である研究成果の社会への還元を試みとして、主として実務家を対象としたものであるが、法科大学院の学生も多数参加し、120名の定員数を超える申込みがあった。

また、シンポジウム終了後に隣接する東京全日空ホテルで開催されたレセプションでは、高橋宏志研究科長の挨拶の後、なごやかな雰囲気の中で歓談が行われた。終了後、多くの参加者より、ミニ・コンサート付きのシンポジウムの企画に対する驚きと賛同の言葉や、非常に有意義な時間を過ごすことができたとの言葉をいただいた。



会場の様子

大学院医学系研究科・医学部/医学部附属病院
先端医療開発研究クラスターシンポジウム
を開催

大学院医学系研究科・医学部附属病院では、疾患生命工学センター、医工連携部、21世紀COEプログラム、科学技術振興調整費による人材養成ユニットや研究プログラム、再生医療をめざすティッシュ・エンジニアリング部、多くの寄附講座及び22世紀医療センターなどの50を超える研究ユニットが、新しい診断法と治療法の開発を目指して活動している。これらの研究ユニットが、相互の連携と社会への広報を強化するために、先端医療開発研究クラスターとして集結し、8月31日（水）安田講堂において、創薬、再生医療、遺伝子治療、ロボット医療、手術機器開発などの先端医療開発研究に関するシンポジウムが開催された。シンポジウムには、文部科学省、経済産業省の方々をはじめ、学内教職員、メディア、病院関係者、製薬会社、寄附講座協賛企業等から700名余りの参加があった。



永井病院長挨拶

医学部附属病院副院長の門脇孝教授が総合司会を務め、廣川信隆医学系研究科長から開催挨拶があり、永井良三医学部附属病院長からは「今回発足した先端医療開発研究クラスターが我が国のトランスレーショナル研究の拠点として、常に新たな星を生み出せるよう努めていく」とのクラスター発足にあたっての挨拶が述べられた。引き続き、赤林朗医学系研究科教授から「先端医療開発研究と倫理—トランスレーショナルリサーチの推進に向けて」と題した基調講演が行われた後、佐久間一郎新領域創成科学研究科教授から「手術の精密化を支援する手術ロボット開発」、高戸毅医学部附属病院ティッシュ・エンジニアリング部長から「ティッシュ・エンジニアリング部における再生医療への取り組み」、夏苺英昭薬学系研究科客員教授から「現場の創薬研究—大学に何が期待されているか」、小山博史医学系研究科クリニカル・バイオインフォマティクス特任教授から「臨床研究における情報基盤整備」について講演が行われた。



立花隆氏

最後に特別講演として評論家・ジャーナリストとして活躍されている立花隆氏をお招きして、「米国のニューロサイエンスと医工連携による先端医療開発の現状」について御講演いただき盛会裏の内にシンポジウムを終了した。

医学部附属病院

医学部附属病院で総合防災訓練を実施

医学部附属病院では、9月2日（金）に約2時間半にわたり東京において直下型地震が発生し、マグニチュード7.0、震度6強の激震により入院棟B6階から出火、また、病院に多数の負傷者が運ばれたことを想定して、本郷消防署の協力を得て合同の総合防災訓練を実施した。

当日は、被災者に扮した教職員が負傷のメイクアップを施して訓練に参加し、本番さながらの緊張感の中で迫真の訓練が行われた。

地震発生の訓練開始放送と同時に災害対策本部が院内に設置され、院内の被害状況の情報収集及び報告訓練が行われた。また、本郷消防署救急隊及び東大病院医療チームによるトリアージ訓練、屋内消火栓による消火訓練等が行われた。

訓練終了後、永井病院長から、東京直下型の地震に対して普段からの備えを行うことが東大病院の医療と大災害時の対応を非常に円滑にするので、是非この心構えで日々取り組んで欲しいとの講評が行われ訓練は無事終了した。



対策本部



救急車で搬送する様子

医学部附属病院

医学部附属病院でサマーコンサート開催

医学部附属病院では、8月24日（水）病院医療サービス推進委員会の主催により外来診療棟1階ロビーで、モスクワ音楽院助教授・くらしき作陽大学特任教授（ピアノ）のアンドレイ・ピサレフ氏（1983年21歳でラフマニノフピアノコンクール優勝、1991年第5回国際モーツァルトコンクール優勝）を迎え、サマーコンサートが行われた。

当日は、患者さまと教職員を併せて約450名が卓越した同氏のピアノ演奏を楽しみ、心に響くピアノの音色に心安らぐひと時をすごした。使用したピアノは東京藝術大学より寄贈を受けたヤマハのグランドピアノである。



ピサレフ氏と心に響くピアノ演奏の様子

【曲目】

- モーツァルト/ソナタ ハ長調第1楽章（k.545）
- シューマン/アラバスク作品18
- リスト/ベトラルカのソネット第104番&第123番
- リスト/エステ荘の噴水
- リスト/愛の夢第3番
- ショパン/子守唄作品57
- ショパン/スケルツォ第2番変ロ短調作品31（アンコール）リスト、ラ、カンパネ

大学院工学系研究科・工学部

夏休み航空宇宙工学教室2005開催

8月3日（水）・4日（木）、本郷キャンパス内で小中学生を対象にした「夏休み航空宇宙工学教室2005」を航空宇宙工学専攻教職員・学生により開催した。本企画は今年で4回目であり、74名の子供の参加があった。

初日は、飛行原理の説明の後、ペットボトルロケットとゴム動力飛行機の工作を行い、研究室も見学した。翌日は、農学部グラウンドと体育館で実際に飛ばして、飛距離や滞空時間を計測した。夏の暑い日差しの中、子供たちの作ったペットボトルロケットは大空に向かって勢い良く飛び、模型飛行機は体育館中を飛び回った。参加した子供たちにとって、航空宇宙分野については科学に対する興味がふくらむ夏の思い出となってくれとうれしい。



ロケット発射準備



最後に記念写真撮影

大学院人文社会系研究科・文学部

平成18(2006)年度大学院人文社会系研究科入学試験日程を発表

9月1日(木)から「平成18(2006)年度大学院人文社会系研究科修士課程及び博士課程学生募集要項」の配布を開始した。日程は以下のとおり。

【修士課程】

第一次(筆記)試験 平成18年1月15日(日)

※社会文化研究専攻社会学専門分野についてのみ
1月16日(月)に論文試験も行う。

第二次(口述)試験 平成18年2月1日(水)

※文化資源学研究専攻及び韓国朝鮮文化研究専攻
については1月31日(火)に行う。

※文化資源学研究専攻については、社会人特別選抜での受入れも行っている。

【博士課程】

第一次選考 論文審査等

(専門分野によっては学力試験を実施)

第二次選考(口述) 平成18年2月6日(月)

※文化資源学研究専攻及び韓国朝鮮文化研究専攻
については2月2日(木)に行う。

※文化資源学研究専攻については、社会人特別選抜での受入れも行っている。

出願期間は以下のとおり。

修士課程 平成17年11月1日(火)～11月7日(月)

(郵送のみ受付。7日消印有効。)

博士課程 平成17年12月7日(水)～12月13日(火)

(直接持参又は郵送。郵送の場合は13日必着)

募集要項の郵送を希望する者は、封筒の表に「〇〇課程学生募集要項請求」と朱書きし、郵便番号・住所・氏名を明記して、200円分(修・博等2部必要な場合は390円分)の切手を添付した返信用封筒(角型2号)を同封し、以下へ送付。

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学大学院人文社会系研究科 事務部

(問い合わせ先)

大学院人文社会系研究科事務部大学院係

電話：03-5841-3710、3712

大学院理学系研究科・理学部

理学系研究科・理学部で留学生見学旅行実施

7月30日(土)・31日(日)に、理学系研究科・理学部留学生見学旅行が行われた。現在本研究科・学部には23カ国から65名の外国人留学生在籍しているが、今年は信州へ特急に乗っての週末旅行を企画し、留学生と国際交流室のスタッフの計22名が参加した。

1日目は新宿駅発の特急あずさで昼過ぎに穂高駅に着。休憩後、駅前のレンタサイクルで自転車を借り、大王わさび園まで途中道端にある道祖神を訪ねながら約1時間半のサイクリングを楽しんだ。山々を背景にどこまでも黄金色の稲穂が広がるのどかな田んぼと土蔵や日本家屋の景色にゆったりとした時が流れ、みな自転車を止めて鳥や花など自然の風景をカメラに収めるのに夢中になっていた。わさび園では有名なわさびソフトクリームを食べ、穂高の山々から流れる清流によって育つわさび田を見学。園内を流れ黒澤明監督の映画「夢」にも出てくる蓼川はまるでこの世のものとも思えないほど清らかに澄み、水車小屋や緑の木々とともに自然の美しさを感じさせてくれた。夕方には安曇野での宿泊先に落ち着き、夕食後はレクリエーションでゲームを行い、参加者同士の交流を深めた。

2日目は午前中にアートヒルズでガラス工芸を体験し、各自がデザイン・作成したオリジナルのガラスのハンコは参加者にとって良い記念品となった。午後は列車で松本へ向かい国宝松本城を見学。我が国最古、五層六階の天守のてっぺんまで急な階段を上りきるとそこは夏とは思えないほど涼しい風が通り抜け、だれもがホッと一息をついた。その後松本駅での集合時間までは自由行動で名物のそばを食べたり、歴史ある街中を散策したり、和太鼓の演奏を見たりとみな日本文化に触れ、気持ちのリフレッシュが出来た旅であった。



松本城での記念撮影

大学院農学生命科学研究科・農学部 文部科学省タンパク3000新事務局開設式

8月10日(水)、文部科学省タンパク3000プロジェクト新事務局の開設式典が大学院農学生命科学研究科にて行われました。同式典には、文部科学省ライフサイエンス課の佐伯浩治課長、呉茂ゲノム研究企画調整官、本学大学院農学生命科学研究科會田勝美研究科長、同田之倉優教授をはじめ、同事務局設立関係者が出席されました。

會田研究科長、佐伯課長のご挨拶ののち、大野美恵新事務局長より、タンパク3000プロジェクト事業及び事務局のあゆみについての報告がありました。式典の後、出席者が見守る中、會田研究科長、佐伯課長の手により、生命科学総合研究棟に設置された事務局入口に看板が据え付けられました。なお、同看板は、會田研究科長揮毫によるものです。



事務局前にて

タンパク3000プロジェクトは、産学官の最適な研究機関によって国家的・社会的課題に対応した研究開発プロジェクトに重点的に取り組む「新世紀重点研究創生プラン」の一環として、文部科学省が平成14年度から開始し、5年間で500億円が投ぜられる一大国家プロジェクトです。世界最先端設備を駆使して、わが国発のゲノム創薬の実現等を目指し、わが国の研究機関の能力を結集して、主要と思われるタンパク質の3分の1(約3,000種)以上の基本構造及びその機能を解析するとともに、成果の特許化まで視野に入れた研究開発を推進しています。田之倉優教授も発生・分化とDNAの複製・修復に関する研究を担当しています。3年を経た段階で、プロジェクト全体で約2,200種以上のタンパク質の解析が完了しています。

今後、目標達成に向けて、事務局の活躍がますます期待されています。

大学院総合文化研究科・教養学部 三鷹国際学生宿舎居住留学生の送別バーベキュー及び音楽会行われる

7月9日(土)、三鷹国際学生宿舎に居住し、留学生生活を終えて7月から9月にかけて帰国する留学生を対象として、同宿舎院生会主催による送別バーベキュー及び音楽会が、宿舎近くの野川公園及び同宿舎で約60名が参加して開かれた。

三鷹国際学生宿舎には、留学生の宿舎生活全般をサポートするため大学院学生のチューターによる院生会が組織されており、本行事はその活動の一環として企画されたものである。



バーベキュー食事中の一コマ

連日の雨により危惧された当日の天候も、留学生たちとの送別に雨雲も同情してくれたのか、終盤に降り出した程度であった。緑豊かな公園の中で、焼けた肉や野菜を頬張りながら、思い出話に花が咲き、さらに参加したフランス人留学生からフォアグラの差し入れがあったり、チューターがそうめんチャンプルーを作って留学生に紹介したり等、参加者はパーティーを十分に楽しんでいったようであった。

バーベキュー終了後、同宿舎に戻り共用棟において送別音楽会が開かれた。最初に披露されたのは留学生によるギター演奏と歌で、優しい歌声とやわらかいハーモニーに会場は包まれた。



音楽会の様子

その後、チューターによるピアノ演奏、ダンス、そして留学生による歌へと続き、それぞれの披露の後には惜しめない拍手が送られた。

院生会は従来からこうした活動を継続して行ってきたり、今後も様々な企画を通して学生間における国際交流への積極的な寄与を計画している。

**分子細胞生物学研究所
分子細胞生物学研究所で外国人留学生との
懇談会開催**

7月15日（金）18時より、農学部生協食堂において、分子細胞生物学研究所留学生との懇談会が開催された。本研究所には、中国、韓国、台湾、シンガポール、フィリピン、インド、バングラディシュ、トルコ、オーストラリア、カナダ、アメリカ、ブラジル、オーストリアから総勢20名の留学生（外国人研究者を含む）が在籍し、研究活動を行っている。

当日は梅雨明け前のむし暑い日で、一日の研究・仕事を終えた留学生、教職員、本研究所の研究活動をサポートしてくれている（財）応用微生物学研究奨励会の役員等、総勢約70名の参加者があった。



懇談会での記念撮影

懇談会は内藤助教授の司会で開会され、宮島所長の挨拶と乾杯の後、和やかに歓談が始まった。途中、Poonam Bhatieさん（オーストラリア）、

金美善さん（韓国）、陳彦榮さん（台湾）、Chng Choon Pengさん（シンガポール）、謝承暉さん（中国）、ホサインモタラブさん（バングラディシュ）から各国のお国柄を表したスピーチがあり、何人かは立派な日本語を披露してくれた。また、応用微生物学研究奨励会からは木下理事長のデカンショ節、都河顧問からのスピーチがあり、予定の2時間はあっという間に過ぎてしまった。

分子細胞生物学研究所は本館、総合研究棟、生命科学総合研究棟に分散しているため、普段あまり顔を合わせる機会のない留学生も多いが、懇談会では留学生との親睦を深め、楽しいひとときを過ごすことができた。

**分子細胞生物学研究所
分子細胞生物学研究所主催「高校生のための
生命科学シンポジウム」開催**

7月29日（金）、弥生講堂一条ホールにおいて、分子細胞生物学研究所主催の、高校生のための生命科学シンポジウムが開催された。この企画は、大学の研究所で行われている研究内容を広く社会に知ってもらうために、高校生および一般市民の参加を呼びかけて開催された。

最初に、宮島篤所長から、東京大学および分子細胞生物学研究所の紹介がなされ、その後に細胞の分化のメカニズムについての簡単なイントロダクションがあった。続いて、後藤由季子教授から、生物の体が作られる過程

で多くの細胞が意図的に死んでおり、その意義あるいはそこに関わるメカニズムについて大変分かりやすい講演があった。特に、会場に来ていた高校生に適宜質問を投げかけ答えてもらうという対話形式の講演がリズムカルで印象的であった。また、多羽田哲也教授からは、動物の体がどのような原理にもとづいて形成されるかについて、昆虫からヒトまで統一された原理があるという大変造詣深い講演があった。最後に、秋山徹教授から、がんの原因とその克服について、基礎研究から薬の開発にいたるまで幅広い内容の講演があった。とくに、がんは細胞



参加者からの質問に対応する宮島所長

のもつ生命力あるいは老化と背中合わせの問題であり、また我々にもっとも身近な病気であることから、聴衆の関心も高かった。シンポジウムには約70名の方が来場し、講演の間には活発な質問も出され、生命科学のおもしろさが十分伝わった有意義なシンポジウムであった。

**宇宙線研究所
シンポジウム「重力波によるアインシュタイン宇宙の探査」開催**

宇宙線研究所では、日本学術会議講堂において7月14日（木）「重力波によるアインシュタイン宇宙の探査」シンポジウムを共催しました（物研連主催、天文研連、特定領域研究「重力波の新展開」総括班共催）。重力波は、アインシュタインの一般相対性理論で予言された時空のひずみ波でその検出を目指す研究が世界的に進められています。シンポジウム当日は、どんよりしたつゆ空にも関わらず、物理学や天文学など関係分野の研究者、学生をはじめ、地方自治体、民間企業等の関係者ならびに一般市民260余名からなる参加者を迎えて、座席がほぼ一杯になるほどの盛況ぶりでした。

講演は、日本の重力波理論を代表する第一人者による講演、重力波を直接検出しようとする本学の実験家2名によるLCGT計画の紹介、ならびに現時点における最高感度をもつ米国の重力波観測所の活動を紹介する米国在住の日本人研究者の講演からなっており、一般の参加者にも分かりやすい言葉で重力波研究の最前線が紹介されました。最後に、小宮山総長から将来重力波でみる宇宙の姿を楽しみにしているという言葉を受け、講演が締めくくられました。

海洋研究所

海洋研究所「海の日」一般公開

海洋研究所は、「海の日」を記念して、恒例の一般公開を7月16日（土）中野地区で「海はひろい」をキャッチコピーに、7月18日（月）岩手県大槌町地区の国際沿岸海洋研究センターで「三陸の海と魚を知ろう」をテーマとして開催した。



一般公開の様子



国際沿岸海洋研究センターの様子

両地区では、市民講座、日ごろの研究成果の紹介、展示及び公開実験など子供から大人まで楽しめる特色のある多数の催しが行われた。年々来所者が増加し、一般市民や小、中及び高校生の方々が来所され大盛況であった。

中野地区では、雨粒を空中に浮遊させる実験体験やロープワーク教室、所内ガイドツアーが好評であった。大槌地区では、近隣の市町村から約700名の方々が訪れ、「海の恵み」をテーマにした講演や大槌湾の生き物を集めて直接触れることのできるタッチプール、今年1月に竣工した調査船「弥生」の公開など海を身近に感じる地域に開かれた研究センターとしての雰囲気が感じられた。

各会場の来場者は、公開実験や各展示コーナーに設置してある実験観測機器、水槽の魚などを熱心に見学され、素朴で好奇心旺盛な質問やスタッフとの活発な情報交換もあった。また、大槌地区での一般公開の様子が地元のテレビで放映されるなど海洋科学の重要性に対する興味・関心の高さが伺われた。

海洋研究所では、海洋科学に関する研究の情報を一般の方々に公開して海洋研究の最前線に触れていただき、研究所への理解を深めていただくために、今後も「海の日」の一般公開をさらに充実して開催していくこととしている。



物性研究所

超低温容器検査所を開設

物性研究所低温液化室では、5月下旬に“超低温容器（液化窒素）検査所”を開設しました。これにより液体窒素の自加圧型容器の再検査を外部委託することなく、所内で行えるようになりました。超低温容器は法により定期的に再検査をするよう義務づけられていますが、再検査の周期が製造後の経過年数等により変わるため、検査を受けるのを忘れてしまうといったこともあったのではないのでしょうか？（検査期間や検査内容等の詳細については、液化室HP“容器検査について”参照）



自加圧型の液体窒素容器

そこで低温液化室では、液化室員が自ら容器検査をすることにより“検査費用を出来る限り安くする”、次回の検査時期を通知して“検査を確実に受けてもらう”といったサービスを提供することにしました。当面は物性研究所内のみに対応となりますが、来年初め頃を目途に所外の超低温容器の検査にも対応できるようにしたいと考えています。また、容器検査に関する疑問、質問などがありましたら、下記までお問い合わせ下さい。

（問い合わせ）

物性研究所低温液化室 内線：63515

MAIL：ekika@issp.u-tokyo.ac.jp

HP：http://www.issp.u-tokyo.ac.jp/labs/cryogenic/

留学生センター

2005年度夏学期留学生センター日本語教育集中コース・特別コース（第40期生）の修了証授与式行われる

留学生センターでは今年4月から本年度夏学期日本語教育集中コース、特別コースを開講していたが、このほど全日程を終了し、8月2日（火）に医学部教育研究棟13階第4セミナー室において、72名の修了者に対する修了証授与式を行った。

式には、来賓の古田理事・副学長のほか関係教員らが列席。古田理事・副学長の挨拶に続いて、修了者ひとりひとりに飯塚留学生センター長から修了証が手渡された。古田理事・副学長は挨拶のなかで、コースをやり遂げたことをねぎらって修了を祝うとともに、今後は上達した日本語を活かして研究に一層励むよう修了者たちに呼びかけた。

留学生センター菊地教授の講評のあと、各クラスの代表者8名がスピーチを行い、日本語のクラスの様子や楽しい思い出、センターの教育への謝辞などを、上達した見事な日本語で述べた。



和やかな雰囲気の中に式は終了し、引き続き山上会館で懇談会が開かれた。これには修了者の指導教員も参加し、修了者たちは指導教員やセンター教員を囲んで写真を撮り合うなどしながら、歓談し、互いに修了を祝い、別れを惜しんだ。

今期はセンターの日本語集中コース・特別コース開設20年目(40期目)にあたるが、20年の歴史の中で、集中コース・特別コースの当初受講者数75名、修了者数72名、修了率96%は、いずれも最多・最高の記録である。

なお、今期の修了者72名の所属は以下の13研究科、出身は以下の37の国(または地域)である。

法学政治学研究科	6名	医学系研究科	5名
工学系研究科	19名	人文社会系研究科	4名
理学系研究科	2名	農学生命科学研究科	10名
総合文化研究科	6名	教育学研究科	3名
薬学系研究科	1名	数理科学研究科	1名
新領域創成科学研究科	6名	学際情報学府	2名
情報理工学系研究科	7名		

韓国	5名	アメリカ合衆国	4名
中国	5名	カナダ	2名
フィリピン	4名	ブラジル	4名
インドネシア	3名	コスタリカ	1名
タイ	9名	コロンビア	1名
トルコ	2名	チリ	1名
ベトナム	1名	エルサルバドル	1名
ミャンマー	1名	メキシコ	1名
パキスタン	1名	イギリス	2名
インド	1名	ブルガリア	2名
台湾	2名	ルーマニア	2名
イラン	1名	ロシア	2名
スラエル	1名	イタリア	1名
アフガニスタン	1名	オランダ	1名
オマーン	1名	ドイツ	1名
エジプト	1名	フランス	1名
チュニジア	1名	ベラルーシ	1名
オーストラリア	2名	ハンガリー	1名
ニュージーランド	1名		

高輝度光源による先端的バイオ研究シンポジウム開催

7月25日(月)に医学部小講堂において、高輝度光源による先端的バイオ研究シンポジウム“Advanced Bio-Science Opened by Third Generation Soft X-ray Synchrotron Radiation”が、東京大学放射光科学推進懇談会と全国組織のVUV・SX高輝度光源利用者懇談会の共催で行われた。柏キャンパスに計画中の高輝度放射光施設を実現するためには、ナノサイエンス・ナノテクノロジーの研究者はもとよりバイオロジー研究者の積極的な参加と支持が不可欠である。

開催趣旨説明の後、浅島誠教授(総合文化研究科)が「高輝度光源への期待」を述べた。Jacobsen教授(ニューヨーク州立大学)は、15nm分解能の水中での細胞の美しいX線顕微鏡像を紹介した。軟X線高輝度光源は、



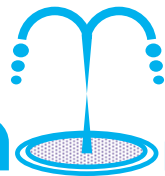
Hitchcock教授

水に対して透明で細胞だけを映し出すことのできる「水の窓」領域の軟X線を高輝度で生成することができるため、細胞等の微小構造が生きたままで観察できる。Hitchcock教授(カナダMcMaster大学)は、走査透過X線顕微鏡により元素毎の吸収スペクトルを活用して50nmの分解

能で分子種のマッピングができることを示した。休憩の後、仁田亮博士(医学系研究科)は、放射光を用いた蛋白質構造解析に基づくKinesinモーターの機構解明について報告した。眞島利和博士(産業技術総合研究所)は、コンタクト型X線顕微鏡による生物組織について報告した。木原裕教授(関西医科大学)は、マイクロXAFSを用いたホヤ血球中のバナジウム分布とその化学状態について報告した。最後に、廣川信隆医学系研究科長が軟X線顕微鏡は状態分析マッピングなど電子顕微鏡では得られない情報が得られるため、それぞれの特徴を活かした研究を推進することによる発展を期待することを述べ、研究会は閉会となった。研究会には約80名が参加し、中身の濃い活発な討論が行われた。



研究会参加者たち(医学部2号館本館前)



噴水

教育学部附属中等教育学校の生徒が遠泳に挑戦!

7月30日(土)から8月2日(火)まで3泊4日で、千葉県富浦において第1回「富浦臨海学校」を実施した。遠泳は、附属学校の前身である旧制東京高等学校の時代から野尻湖で行われていた伝統的行事であったが、平成6年から施設の関係から中断せざるを得ない状況に追い込まれたという経緯がある。

1学年生徒120名が学校のプールで練習を十分行った上で遠泳に挑戦した。

現地の水泳の指導は、筑波大学附属中学校の卒業生が運営している「桐遊クラブ」の方々が行った。筑波の附属中学校の遠泳指導を毎年行なわれており、本年度で101年目を迎えている。はじめの挨拶で、山口和夫師範は「ここは、水泳の道場である」と述べて、遠泳の実習が始まった。

附属の生徒たちは、海での泳ぎは初めての者が多いなか、3日目の午前中に1時間5分の遠泳を行った。海岸から沖までを地元の漁船、和船に見守られる中の挑戦であった。万々に備え、教育学部の衛藤隆教授も漁船のついでに生徒たちとともに航行した。70数名が大遠泳に成功した(残る生徒は泳力により中遠泳、小遠泳を行なった)。三橋俊夫副校長も生徒とともに遠泳を行なった。

師範は、「今回の遠泳は95点」と高く評価した。

また、今回の臨海学校では水泳指導の補助員として、附属学校の卒業生1名と6年1名、5年1名、2年3名の計6名が参加した。この行事を長く続けていくためには、こうした卒業生、上級生の参加が大切である。

この行事に参加した生徒は、「友達とのコミュニケーションの取り方を学んだ」、「役割分担を確実にこなすことの大切さを実感した」、「集団生活でマナーを理解した」、「この行事の関係者への感謝の心を改めて知った」といった感想を述べている。

臨海学校を終えて、貴重な経験のもと、ひと回り大きく成長した1年生であった。

(教育学部附属中等教育学校 野崎雅秀)



コミュニケーションセンターだより No.3

■コミュニケーションセンターがグッドデザイン賞にノミネート

コミュニケーションセンターは、コミュニケーションマークを制定し、明治期の建物を改装、大学の研究教育活動を象徴する物品やマーク入りの商品を販売することで、大学と社会・世界との双方向的なコミュニケーションを図ってきました。

こうした取り組みが、多様なメディアのミックスによるコミュニケーションツールとして、「グッドデザイン賞」のコミュニケーションデザイン部門にノミネートされました。

「グッドデザイン賞」は、1957年に通商産業省(当時)によって創立された「グッドデザイン商品選定制度」(通称Gマーク制度)を母体とする総合的デザイン評価・推奨制度で、(財)日本産業デザイン振興会が運用しているものです。

Gマークは、形の美しさだけではなく、「品質の良さ」「使いやすさ」「商品としてのバランスの良さ」が認められたものが付けられるマークであり、商品などのテレビCM、新聞・雑誌広告、また、店頭でご覧になったことがある方も多いことでしょう。



このグッドデザイン出品作品の中から一次審査を通過したノミネート作品の展示会が8月25日(木)から27日(土)の3日間、東京ビックサイトで開催されました。



会場では多くの方がコミュニケーションセンターの商品をご覧になっていましたが、おそらく大学のデザインで展示されていたところは他にはなかったと思います。

最終結果は10月3日(月)に発表されるそうですが、コミュニケーションセンター・UTマークが、デザインとともに多くみなさんに支持していただけるような存在でありたいと思っております。

*コミュニケーションセンターにおいてほしい商品がありましたらリクエストをお寄せください。お待ちしております。

(担当: 渉外本部 曾我)



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

AGS推進室

東京大学AGS研究会平成17年度研究課題の募集

募集

東京大学、マサチューセッツ工科大学（MIT）、スイス連邦工科大学、チャルマーズ工科大学によるAGSの国際的な研究・教育活動については、4大学全体の取組みに注力してきましたが、昨年の研究課題募集時にご連絡したとおり、4大学間では今後各大学の位置する地域の活動にこれまでより力をいれるという方針が決定されました。本学AGS研究会ではこれまでもアジアでの研究を実施してきましたが、上記の方針の下、さらにアジアの活動を推進し、取り分け中国、韓国、東南アジア諸国、インドでの取組みを強化する方針で、これらの国を代表する大学・研究機関との連携（Alliance for Sustainable Asia/ASA）を推進して行く予定です。また、本年度より発足したサステナビリティ学連携研究機構と協力して、新たな展開を考えています。

さて、AGS研究会では、平成17年度の研究課題を募集します。本年度は研究基金の配分については、アジアを視点に置きながら、Full Projectについては、AGSの重点分野である水、食糧、エネルギー、Mobility、リスクマネジメントなどに関する研究課題の他に、新しい展開として、持続可能性を支える文化の多様性や持続可能な社会とGenderの役割などの新しい研究課題についても研究基金を配分します。一方で、将来重要性が期待されるSeed的な研究課題についても研究基金を用意します。

是非、新しいアイデアに基づいた研究課題の提案をお願いします。

1. 研究課題の採択基準

- ・Sustainabilityに関する研究プロジェクトとして採択されることを目指す研究であること、出来ればAGS以外からの基金獲得の可能性や、民間との共同研究の可能性が見込まれる研究が望ましい。
 - ・学際性、国際性、社会連携（注1）のいずれか一つ以上を満たすものであることが必須条件となる。
 - ・研究課題用の応募用紙を用いる。
 - ・一件当たりFull Projectは年間200万円以内、Seed Projectは50万円の研究助成基金の予定。
- （注1）社会連携：技術や制度の社会における実装・普及を念頭に置き、研究プロジェクトにおいて社会の様々な関係者と連携すること。

2. 研究課題応募に際しては下記の点にご留意ください。
 - ・研究代表者は教員であることが必須ですが、共同研究者として研究員、大学院院生が参画できます。
 - ・従来、海外で実施されるAGS年次総会やTechnical Meetingへの参加旅費を研究課題申請の際に申請額に含んで応募いただきましたが、海外で開催されるAGSの年次総会、Technical MeetingやAGSが関与する会議で重要と認められた会議に参加する場合の旅費は別途予算として計上準備する予定です。従って、本年度の課題申請に当っては、上記会議への参加費用の計上の必要はありません。
3. 応募ご希望の方は、AGSのホームページ（<http://www.esc.u-tokyo.ac.jp/ags/newproject2005.htm>）から申請用紙をダウンロードし、申請書に必要事項を記入の上、10月14日（金）までに電子メールに添付し、下記へご提出ください。提出期限までに十分な期間がなく、申し訳ありませんが、よろしくお願ひします。

申請書の提出先・問い合わせ先：

AGS推進室 浅尾 修一郎（AGSコーディネーター）
内線27937 E-mail：asao@esc.u-tokyo.ac.jp

附属図書館

総合図書館備付け図書の推薦について

お知らせ

総合図書館では、学生の学習・研究を助け、教養をより豊かにするために、全学の教員（常勤講師以上）から図書を推薦していただく制度を設けています。

平成17年度冬学期授業に向けて下記のとおり図書の推薦をお願いします。

1. 取りまとめ窓口 各部署図書館（室）
2. 推薦期限 9月22日（木）
なお、その他の図書の推薦は常時受け付けます。
3. 推薦方法 総合図書館備付け図書推薦要領による。

情報基盤センター

データベース定期講習会のお知らせ

お知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、下記のとおりデータベース定期講習会を実施します。東京大学にご所属であればどなたでも参加できます。どうぞお気軽にご参加ください。

また、ネイティブスピーカーの講師による英語編も好評実施中です。9月の英語編は、Web of Scienceの講習会です。留学生の方のご参加もお待ちしております。

[会場] 総合図書館 1階メディアプラザ I 講習会コーナー

[定員] 12名 (先着順。予約不要。会場に直接お越しください。)

◆各コースの内容◆

1時間コース

特定のデータベースについての解説や検索実習が中心の講習を受けたい方には、こちらがおすすめです。

コース名	内 容
入門編	文献の所在調査のテクニックの習得を目的として、基本的なデータベースの実習を行います。
FELIX 編	学術雑誌の目次情報検索システムFELIXを使って、キーワードを入力するときのコツなどを実習しながら解説します。
Web of Science 編	引用索引データベースWeb of Scienceの検索実習や、検索結果の分析などの便利な機能を紹介します。
電子ジャーナル 編	電子ジャーナルの利用方法や注意点の解説、検索実習や、便利な機能を紹介します。

講習会に関する詳細は、

<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/dl/koshukai/> をご覧ください。

(問い合わせ)

情報基盤センター学術情報リテラシー係 (22649)
literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

30分コース NEW

目的ごとにどんなデータベースがあるか知りたい方、短時間で知識を得たい方にはこちらがおすすめです。

コース名	内 容
本をさがす編	読みたい本が所蔵されているかどうかを調べるとき、東京大学で所蔵されていない本をさがすとき、テーマから本を探するときなど、本をさがすときに使う各種データベースを紹介します。
雑誌をさがす編	キーワード等から論文をさがすとき、読みたい論文が掲載されている雑誌・電子ジャーナルをさがすときなど、論文・雑誌をさがすときに使う各種データベースを紹介します。
新聞をさがす編	新聞記事をさがすときに使う各種データベースの紹介と使い方の解説、新聞の所在を調べるときのデータベースを紹介します。
統計をさがす編	統計をさがすときに使う各種データベースの紹介と使い方の解説をします。

◆スケジュール (9~10月) ◆

月	火	水	木	金
9/5 11:00-12:00 Web of Science	9/6	9/7	9/8	9/9 17:00-17:30 本をさがす
9/12	9/13	9/14	9/15 15:00-15:30 雑誌をさがす	9/16 17:00-18:00 電子ジャーナル
9/19	9/20	9/21 11:00-11:30 新聞をさがす	9/22	9/23
9/26 17:00-18:00 入門	9/27 13:30-14:30 Web of Science (英)	9/28	9/29	9/30
10/3 15:00-15:30 本をさがす	10/4 17:00-18:00 FELIX	10/5	10/6	10/7
10/10	10/11	10/12	10/13 17:00-18:00 Web of Science	10/14 17:00-17:30 雑誌をさがす
10/17	10/18	10/19 11:00-12:00 電子ジャーナル	10/20 15:00-15:30 新聞をさがす	10/21
10/24	10/25 15:00-16:00 入門	10/26 17:00-17:30 統計をさがす	10/27	10/28

大学院総合文化研究科・教養学部 「高校生のための金曜特別講座」(冬学期)の お知らせ

お知らせ

教養学部では、高校生を対象とした公開講座を開講しています。高校生のみなさんの勉学意欲を高める一助になればと、教養学部教員が学問研究の面白さや重要さを分かりやすく解説します。進路について考えている高校1、2年生にはとくに聴講をお薦めします。もちろん、高校生だけでなく、一般の方々のご参加も歓迎です。主催者側で出席カードを発行し毎回、出席を確認し捺印いたします。

日 時：10月14日（金）からの毎週金曜日18:10～19:30

場 所：教養学部11号館2階1106教室

参加費：無料

参加登録：不要

「21世紀の知への誘い」

10/14	「スーパーマンを救えー生物の再生」 松田良一 生命環境科学系（生物学）
10/21	「イングリッシュ・ガーデンの裏側」 安西信一 地域文化研究専攻（英語）
10/28	招待講演「アフリカの飢餓と闘うマンザナー・プロジェクトの現在」 Gordon H. Sato（米国科学アカデミー会員）
11/4	「意外と身近な物性物理の世界ー物理をたのしむー」 前田京剛 相関基礎科学系（物理学）
11/11	「生物が持つ分子機械の形と働きを見る」 栗栖源嗣 生命環境科学系（生物物理学）
11/18	「日常生活から歴史をとらえ直す」 義江彰夫 超域文化科学専攻（歴史学）
12/16	「異文化理解の想像力」 森山 工 地域文化研究専攻（文化人類学）
1/13	「生命システムの学習と記憶、淘汰と順応」 安田賢二 生命環境科学系（生物学）
1/27	「「存在の謎」について考える」 北川東子 超域文化科学専攻（ドイツ思想）
2/3	「文化人類学とはどんな学問なのか？」 伊藤亜人 超域文化科学専攻（文化人類学）
2/10	「モバイルライフー携帯端末考」 川合 慧 広域システム科学系（情報）

(問い合わせ先)

教養学部社会連携委員会「公開講座」担当係

TEL：03-5454-6637

H P：http://www.c.u-tokyo.ac.jp/jpn/kyoyo/koukai
2005winter.html

原稿募集

「学内広報」に学内の情報をお寄せください。

- ・文字数800字以内（写真がある場合は文字数を控えるにしてください。）
- ・写真には、キャプション（説明文）を必ず添えてください。
- ・原稿は電子データで下記まで、メールまたは学内便でお送りください。

送付先 東京大学総務部広報課

TEL：03-3811-3393 内線：22031、82032

FAX：03-3816-3913

E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

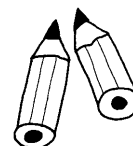
原稿の締切は各月第1・3水曜日、配付は翌々週の火曜日です。ただし、該当日が祝日の場合を除きます。

平成17年度の学内広報の発行スケジュール

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

これからの学内広報発行スケジュール

号数	発行日	原稿締切	配布日
1320	9月28日（水）	9月21日（水）	10月4日（火）
1321	10月12日（水）	10月5日（水）	10月19日（水）
1322	10月26日（水）	10月19日（水）	11月1日（火）
1323	11月9日（水）	11月2日（水）	11月15日（火）
1324	11月24日（水）	11月16日（水）	11月30日（水）



人事異動（教員）

発令年月日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（死 亡）			
	藤井啓司	平成17年8月14日死亡	大学院人文社会系研究科助教授
（退 職）			
17.7.15	DUTTA DUSHMANTA	辞 職	生産技術研究所附属都市基盤安全工学国際研究センター助教授
17.8.31	大滝純司	//	医学教育国際協力研究センター助教授
（採 用）			
17.7.16	本田利器	大学院工学系研究科助教授	京都大学防災研究所助手
//	河端瑞貴	空間情報科学研究センター助教授	筑波大学大学院システム情報工学研究科講師
17.8.1	梅崎昌裕	大学院医学系研究科助教授	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科講師
//	柳原 大	大学院総合文化研究科助教授	豊橋技術科学大学体育・保健センター助教授
//	正宗 賢	大学院情報理工学系研究科助教授	
17.8.16	染矢 聡	大学院新領域創成科学研究科助教授 (出向)	独立行政法人産業技術総合研究所研究員
（昇 任）			
17.7.16	後藤典子	医科学研究所助教授	医科学研究所講師
//	内丸 薫	医科学研究所附属病院助教授	医科学研究所附属病院講師
//	高橋 聡	医科学研究所附属先端医療研究センター助教授	医科学研究所附属病院講師
//	保谷 徹	史料編纂所教授	史料編纂所助教授
//	末柄 豊	史料編纂所助教授	史料編纂所助手
17.8.1	池田 均	大学院医学系研究科助教授	医学部講師
//	福山 寛	大学院理学系研究科教授	大学院理学系研究科助教授
//	谷本雅之	大学院経済学研究科教授	大学院経済学研究科助教授
//	五十嵐健夫	大学院情報理工学系研究科助教授	大学院情報理工学系研究科講師
//	中埜良昭	生産技術研究所教授	生産技術研究所助教授
//	吉川暢宏	//	生産技術研究所附属サステイナブル材料国際研究センター助教授
//	鈴木秀幸	生産技術研究所助教授	大学院情報理工学系研究科助手
17.8.16	川出敏裕	大学院法学政治学研究科教授	大学院法学政治学研究科助教授
//	岸田省吾	大学院工学系研究科教授	大学院工学系研究科助教授
//	吉田真吾	地震研究所附属地震予知研究推進センター教授	地震研究所附属地震予知研究推進センター助教授
17.9.1	佐藤健二	大学院人文社会系研究科教授	大学院人文社会系研究科助教授
//	新井 充	環境安全研究センター教授	大学院新領域創成科学研究科助教授

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。
 東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。



東大OB明石顕選手、世界陸上50km競歩で15位!

今夏ヘルシンキで行われた世界陸上の50km競歩に、東大出身の明石顕選手(総合警備保障)が出場しました。明石選手は東大に入ってから陸上を始め、当初は長距離をやっていましたが、1年の秋から競歩を始めました。するとめきめき力をつけ、4年生で日本の学生でも入賞できるレベルに達しました。卒業後も競歩を続けたいと思い、競歩のできる就職をし、50km競歩に取り組んでからは世界レベルに届くようになりました。今年には日本選手権で2位になり、卒業7年目で世界陸上初出場を果たしました。



50km競歩は大会7日目に行われました。大会中は雨が続き、気温も15度位が続いていましたが、競技当日は晴れて気温も20度位でした。競技場入場時から、こちらの声援に手を振る余裕があり、リラックスしている感じでいよいよスタート。作戦通り後方につけ、1kmから周回コースに入ります。競歩は走ってはいけませんから、レース中審判が必ず歩型をチェックする必要があります。そのため審判が見やすい周回コースで行われることが多く、今回は1kmの道を行ったり来たり1周2kmの周回コースで行われました。



コースは微妙な高低差があり、競歩のコースとしてはかなりタフのようです。

序盤は44人スタートした中で、30位位の

集団を走ります。もう一人日本から出場した山崎選手は20位集団。そして徐々に差は広がっていきます。

半分をすぎて、先頭のロシアの選手には1周抜かれました。明石君のペースは安定していますが、徐々に落ちつつある状態です。一方で、後半になると完全にばてて脱落する選手や、歩型違反で失格する選手も出てきており、順位は次第に上がってきて30km位では20番台半ばまで上がってきました。山崎選手はもっと快調に前を追っています。40kmを過ぎて、一時は山崎選手に1周抜かれるかという状況になりました



が、その後、明石君は粘りを発揮し、逆に差を詰め始めました。そして順位はさらに上がり、最後に二人を抜いて、15位でフィニッシュ。タイムは世界の一流の目安となる4時間を切って3時間59分35秒でのゴールでした。山崎選手は8位。ゴールしたのは23人。失格が14人。途中棄権が7人。コースが厳しく、後半は日差しが結構強く、難しいレースでした。その中での価値ある15位でした。

明石選手は東大に入ってから競歩を始め、今も駒場を練習の場として使っていて、駒場から世界に挑戦して世界15位という結果を残しました。陸上部に限らず運動部の皆さんは、ぜひ彼のように目標を高くもって競技に取り組んで下さい。明石選手もこれで満足しては面白くないですから、さらにも上のレベルを目指してやっていってくれるものと思います。本当におつかれさまでした。



(東京大学陸上運動部監督 八田秀雄)

原稿募集

「学内広報」には、みなさんから投書を寄せていただくコーナーとして「噴水」が設けられています。本学における教育・研究活動等に関する意見等をお寄せください。広報委員会が適当とするものを、適宜、掲載します。

【原稿の送付先】 東京大学総務部広報課(担当:渡辺、宮川)

MAIL: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

【お問い合わせ】 TEL: 03-3811-3393

内線: 22031、82032



EVENT INFO

行事名	日時	場所	連絡先・HP等
医薬品評価科学講座Intensive Course 第1回講演会	9月22日(木) 13:00~	医学部鉄門講堂	医薬品評価科学推進事業室 03-5800-6988 http://www.f.u-tokyo.ac.jp/regsci/koenkai.htm
第10回分子細胞生物学研究所シンポジウム 「情報生物学」	9月22日(木) 13:00~	弥生講堂一条ホール	分子細胞生物学研究所 03-5841-7834 Mail:akiyama@iam.u-tokyo.ac.jp http://www.iam.u-tokyo.ac.jp/symposium.html
CGS国際シンポジウム ドキュメンタリー映画会議	9月23日(金)、 24日(土)	駒場キャンパス18号館ホール	「人間の安全保障学」事務局 042-330-5665 http://www.cgs.c.u-tokyo.ac.jp/new/news_events.htm
国際ワークショップ 「マルチエージェント・シミュレーションと社会科学の方法」	9月24日(土)、 25日(日)	ファカルティハウス(駒場)	「マルチエージェント・シミュレータによる社会秩序変動の研究」プロジェクト http://citrus.c.u-tokyo.ac.jp/mas/index.htm
2005年度 空間情報科学研究センター年次シンポジウム - CSIS DAYS 2005 - ※学内広報1318号参照	9月27日(火)、 28日(水)	山上会館大会議室(2階)	空間情報科学研究センター第8回年次シンポジウム受付係 Mail:csisdays05-office@csis.u-tokyo.ac.jp http://www.csis.u-tokyo.ac.jp/sympo2005/
第20回工学部・工学系研究科技術発表会 ※学内広報1318号参照	9月29日(木) 10:00~	武田先端知ビル武田ホール	工学系研究科・工学部総務課厚生係気付 技術発表会実行委員会 (内線26019)
第26回ビジネスローセンター公開講座 「営業秘密の刑事罰による保護」	9月29日(木) 13:30~	法学部22番教室(法文1号館)	東京大学ビジネスローセンター(BLC) http://www.j.u-tokyo.ac.jp/blc/openseminar.html
平成17年度農学部キャリア講演会「先輩に学ぼう!あなたのキャリアストラテジー」	9月29日(木) 13:00~	農学部1号館2階8番講義室	大学院農学生命科学研究科・農学部 http://www.a.u-tokyo.ac.jp/carrier.html
シンポジウム「文化ファクターとしての苦痛」	9月29日(木)、 10月1日(土)	山上会館大会議室	大学院人文社会系研究科・文学部ドイツ語ドイツ文学研究室 http://www.l.u-tokyo.ac.jp/cgi-bin/report.cgi?mode=2&id=37
第7回BEAT特別セミナー「ヨーロッパ・モバイル放送の現状と教育利用の展望」	10月1日(土) 14:00~	武田先端知ビル武田ホール	BEAT 大学院情報学環ベネッセ先端教育技術学講座 03-5841-2663 http://beatii.jp/seminar/index.html
COE「化学を基盤とするヒューマンマテリアル創成」国際会議	10月3日(月)、 4日(火)	武田先端知ビル武田ホール 山上会館	21世紀COE「化学を基盤とするヒューマンマテリアル創成」事務局 Mail:coe@chem.t.u-tokyo.ac.jp http://www.appchem.t.u-tokyo.ac.jp/coe/1-4-j.html
東洋文化研究所 平成17年度第3回定例研究会	10月6日(木) 14:00~	東洋文化研究所大会議室(3階)	東洋文化研究所企画委員会 http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/
外国法の調べ方セミナー「英国法・韓国法」	10月6日(木) 15:00~	総合図書館3階会議室	大学院法学政治学研究所附属外国法文献センター 03-5841-3198 http://www.j.u-tokyo.ac.jp/lib/gaisei/semi2005_annai.html
COE「未来社会を担うエレクトロニクスの展開」国際シンポジウム	10月11日(火)、 12日(水)	武田先端知ビル武田ホール	電気系COE支援オフィス 03-5841-6793 Mail:coe21@ee.t.u-tokyo.ac.jp http://www.ee.t.u-tokyo.ac.jp/coe/conf05.html
数理科学研究科談話会	10月20日(木) 16:30~	数理科学研究科棟117号室	大学院数理科学研究科 http://faculty.ms.u-tokyo.ac.jp/seminar/colloquium.html
社研 人材ビジネス研究寄付研究部門 成果報告会シンポジウム	10月24日(月) 15:00~	山上会館	社会科学研究所 人材ビジネス研究寄付研究部門 http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/jinzai/
第27回ビジネスローセンター公開講座「財産開示手続の創設と間接強制の拡大ー最近の民事執行法の改正からー」	10月27日(木) 15:00~	法学部25番教室(法文1号館2階)	東京大学ビジネスローセンター(BLC) http://www.j.u-tokyo.ac.jp/blc/openseminar.html
行事名	開催期間	場所	連絡先・HP等
常設展「よみがえる幕末明治の人々」 ※学内広報1317号参照	7月~10月	総合図書館3階ロビー	総合図書館 03-5841-2646(音声案内) http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/josetsu/
公開講座「高校生のための金曜特別講座」(冬学期) ※24ページ参照	10月14日(金)~ 2月10日(金)	教養学部11号館2階1106教室	教養学部社会連携委員会「公開講座」担当係 03-5454-6637 http://www.c.u-tokyo.ac.jp/jpn/kyoyo/koukai2005winter.html
東大病院第8回食事療法展 「はじめませんか?食事改革」	10月24日(月)~ 28日(金)	東大病院入院棟A1階レセプションルーム	東京大学医学部附属病院栄養管理室 03-5800-8637 http://www.h.u-tokyo.ac.jp/news/news.php?newsid=93
特別展示 『ディオニュソスとペプロフォロスー東京大学ソナ・ヴェスヴィアーナ発掘調査の一成果』	10月15日(土)~ 11月13日(日)	総合研究博物館本館	総合研究博物館 ハローダイヤル 03-5777-8600http://www.um.u-tokyo.ac.jp

ためらいと決断

業績－パワーハラスメント、定員－単位取得退学、法人化－単年度決算、建前と本音等々、これらの言葉が頭の中を駆け巡る。現在の大学とそれを取り巻く環境の様々な状況が激動の中にあるという実感である。

大学が法人化されて1年余が過ぎた。様々な利点が見込まれるはずであった。研究室運営の立場からは、何よりも先ず単年度決算にこだわる必要のないことが最大の魅力であった。次年度に繰り越して少々高額な備品の購入も可能と期待した。また、目算がたてば赤字覚悟で緊急に必要な備品を購入できると期待した。これまでも研究科の裁量である程度柔軟に対応されていた。法人化により一層自由度が増すと期待した。しかし、実情は期待したこととは大分異なっているようだ。以前は、大型の分析装置等は概算要求での購入が主流で、10年前後での更新をめどに運用にあたった。近年、外部予算を獲得して購入する例が多い。このような場合、特定の研究プロジェクトの利用が優先し、教育目



的や基盤研究を支える専攻や研究科レベルでの共同利用の設備としては利用しにくい。先端的な研究優先は理解できなくはないが、そのあおりで基礎教育、基盤研究がしわ寄せを受けていないか、周囲でそのような危惧がささやかれている。さて、どう対応するか。先ずは研究成果を挙げることも一つである。勢い、学生の指導に熱が入る。

昔から耳にし、己の経験からも納得はしているが、教授が学生に対して感じている距離と、学生が教授に対して感じている距離には大分差があるようだ。プロジェクト研究で求められる成果や学位論文としてある基準の成果を期待して、時として学生に厳しい要求を突きつける。本人のためにも良いと考えている。しかし、その叱咤激励が学生には大きな精神的負担となる場合も少なくないようだ。学生の感じ方の個人差も結構大きい。

信頼関係を築きながら己の信じることを押し進めるほかない。学生との距離を測りながらなどというのはどうも受け入れがたいが、時として、己の言動を客観的に見つめなおしてみる必要はありそうだ。

山口 五十磨 (大学院農学生命科学研究科)

(淡青評論は、学内の職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1319 2005年9月14日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学総務部広報課 ☎ 03-3811-3393
e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
ホームページ http://www.u-tokyo.ac.jp/index_j.html



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO